人文科教育研究　15　1988年　pp. 1-4

# イメージと読むこと

湊　　吉正

## 1. 意味とイメージ

私は，これまでに，いわゆるイメージをテーマとした論文をまとめた経験はなく，したがってイメージについて明確な規定を行ったこともないが，それについて意味の面から触れた論文の箇所を書いた経験はもつ。まず，それらの中から二点を選び，以下に提示させていただきたい。

A　統合的全体としての語句の意味（『国語教育新論』<明治書院，昭62>「Ⅳ－四　語句と意味」2より）

(1)骨格的部分（凝集的，静態的特質）

対象的意味・結合的意味

(2)随伴的部分（凝集的，力動的特質）

情意的，イメージ的，連想的，文体的諸要素としての意味

(3)反映的部分（移行的，力動的特質）

表現，理解的意味

先に，意味的形式について，言語の内容面を同時に包含したものとしての言語の資材面の表出・受容の操作・使用に関する形式として規定した。そしてそこには，次のような意味の本質的作用が含蓄されていると考えられる。すなわち，その意味作用は，資材的形式に内容を充実させて，それを意味的形式へと変貌させる作用として説明されうるものである。そこでさらに，「内容を充実させる」ということは，言語活動の主体が，その言語生活の実際的な場面の必要に即しつつ，その生活に属するさまざまな対象の特徴に対応させて言語の資材面を操作・使用することであると説明されうるであろう。慣習性・形式性をそなえた集団的形象に属するものとしての意味は，そのような操作・使用の慣習的な型にほかならない。

B　受容者的意味をめぐって（『国語教育新論』<明治書院，昭62>「Ⅳ－六　映像と言語－その意味－」3より）

映像にしても言語にしても，それを作品として受容する場合，その受容者内部における知覚段階から解釈段階への過程を想定することができる。映像の場合は，その映像的能記の知覚像に対する意味作用の過程を中心としてそれが進行するのに対し，言語の場合は，言語的能記（音声・文字）の知覚像に対する意味作用の過程を中心としてそれが進行するものとみられる。

しかしいずれの場合にも，さらに言語やイメージの連想的要素，情意的要素などが多様多彩に随伴してくることは確かである。

上記A，Bにつき注記を加えることを通して，意味とイメージとの関連の問題に触れてみたい。

Aの提示箇所は，語句の意味の諸相についてまとめ，さらにその意味の本質面について説明を試みたところである。そこにおいて，イメージ的要素は，随伴的部分の一環をなすものとして位置づけられているが，それは，意味を広義に解して語句に伴う内容的な要素を広くそこに包含させた場合，イメージ的意味として規定されうることになる。

しかし，それに関しては，意味の本質面が意味作用に求められるべきこと，そしてその意味作用は，資材的形式を意味的形式へと変貌させる作用，能記を所記的に充実して記号へと変貌させる作用として規定されることを前提にすえて考えてゆかなければならない。すなわち，語句に伴うイメージ的意味は，その意味作用に対応する意味の骨格的部分に，常に随伴する凝集的，力動的特質を示す要素として位置づけられることになるのである。サルトル（Jean－Paul Sartre）はイメージの構成分としての知（Ie savoir）[1]の役割を強調しているが，ここにおける意味の骨格的部分は，その知に該当するものとして解釈されうるように思われる。

以上は，語句のスケールの中においてではあるが，現象学的な意味の本質面の把握の上に立ちつつイメージ的意味の随伴的性格について説明を試みた次第である。

Bの提示箇所での要点としては，第一に表現あるいは作品としての映像・言語の受容に際し，受容者の内部で，能記の知覚段階から解釈段階へと進行するイメージを含む受容過程において，映像と言語との間に構造的同一性のみとめられることが指摘され，第二には，映像と言語との間に，そのような受容過程における構造的同一性，その基盤としての意味作用の同質性がみとめられることを前提としつつも，しかしイメージを含むそこに随伴する諸要素の機能相については，相違点の見いだされることが指摘される。

第一の要点における映像と言語との間の意味作用の同質性に関しては，バンヴェニスト（Émile Benveniste）の「言語体系は，すべてのセミオティックな体系の解釈者であるという原理」[2]の線に沿って，またメッツ（Christian Metz）の「普遍的注釈者としての言語体系の規約」[3]の把握の線に沿って，言語記号のになう意味作用に根拠づけられるべきものと考えたい。

第二の要点におけるイメージを含む随伴的諸要素の機能相にみられる相違点に関しては，受容者の受容過程において，イメージへと展開してゆくべき能記の知覚像の段階で，映像と言語との間に見いだされる一つの大きな相違点について考察を加えてみたい。その一つの大きな相違点とはすなわち，映像の場合には，物理的事象の強力で受動的な再現的制約がみとめられるのに対し，言語の場合には，イメージを含む心的活動のかなり自在で能動的な広がりの場がみとめられるという点である。

これは，映像表現が物理的事象の光学的あるいは電気的再現像としての映像的模擬の連続体であると説明されうるのに対し，言語表現は，慣習性と形式性をそなえた記号体系に基盤を置く言

語記号の連続体であると説明されうるような，映像表現と言語表現との間に見いだされる特性間の対立的相違にもとづくところが大きいと思われる。ソシュール（Ferdnand de Saussure）の言語記号論でいえば，所記と能記との間の関係の有縁性と無縁性との間の対立，ワロン（Henri Wallon）の記号論[4]でいえば，模擬（simulacre）と記号（signe）との間の対立として説明されうることになるが，それは一つの観点からみれば，映像における関係事象の模擬への再現的特性と，言語における関係事象と言語記号との相互媒介的特性との間の対立として説明されうるであろう。

なお，以上Bの提示箇所についての注記は，受容者の映像表現・言語表現に対する受容過程に即した内容の場合に限定されたものであることを確認させていただきたい。

## 2. 読むことにおけるイメージ

1においては，主として意味とのかかわりの面からイメージの特性に触れてきたが，2では，それを受けて，特に読むことにおけるイメージの特性について考察を進めてみたい。まず，読むこととイメージとの関連について触れた論文の箇所から一点を選び，以下に提示させていただきたい。

C　生活世界を読む（日本読書学会『読書科学』30巻4号，通算118号<昭和61年12月>所収，「読むことと生活世界」2より」

われわれが読む立場に立って読むことを進めてゆくとき，われわれは，何を対象として読んでいるのであろうか。そのような読むことの対象世界として，三つの段階を設定することが可能である。すなわち，第一にことばを読む段階，第二にイメージを読む段階，第三に生活世界を読む段階である。

……

以上第一の，ことばを読む段階の基盤の上に，第二の，イメージを読む段階が設定される。読むことはまず，一次元的線条約に展開してゆくことばの流れを読みとってゆくことであるが，そのことばの流れは，ことばの骨格をなす概念的意味の流れとともに，それに随伴するイメージ的意味の流れを形成してゆく。「ことばの中で自然的に与えられる事物の幻想は，深い。」[5]とは，ソシュールの言であるが，このイメージ的意味の流れは，事物を読む主体へと媒介する機能をになっている。ことばを読むことは，同時に，イメージを読んでゆくことを，そこに随伴させることになるとみられる。

以上第一，第二の段階の基盤の上に，第三の，生活世界を読む段階が設定される。……

上記Cにつき注記を加えることを通して，読むことにおけるイメージの問題に触れてみたい。読むことは，読む主体が文字記号・言語記号の世界に目を開くことを通して，広く生活世界へと身を開いてゆくことであり，したがって，人間が文字記号を開発するにつれて，読むことは，人

間に，その生活世界に対して身を開かせる基本的方法として位置づけられてきた。それとの関連で，読むことが人間の学習の基本的方法として採用され活用されてきたわけである。それでは，読むことにそのような大きな力を得させたものは，何であったのか。それは，読むことに際してのイメージの媒介的機能であったと答えることができよう。さらにいえば，ことばの流れに伴って形成されるイメージ的意味の流れのもつ，関係事象を読む主体へと媒介する機能であったということができよう。

読むことに際しては，他の言語活動形態と同様に，全体的意味内容の構成作用が働くことになるが，受容的，拡散的，移行的なありようでそれが行われる点に，その大きな特徴点がみとめられる。ロラン・バルト（Roland Barthes）は，とりわけ『テクストの快楽』（Le plaisir du texte）[6]の中で，テクストを読む体験に伴うイメージ体験としての喜び，うれしさ，楽しさ，しなやかさを語ると同時に，移ろいやすさ，不確かさ，あやうさ，あやしさをも語っている。古来，韋編三絶ということが尊重されてきたことは，一面において，読むことに伴うそのようなイメージ体験の根源的な移ろいやすさ，不確かさを証しているともみられる。

サルトルが，その『想像力の問題』（L'imaginaire）[7]の中で，学問的著作を読むような場合の「意味的知」（Ie savoir signifiant）が登場してくる読書意識と，小説を読むような場合の「想像的知」（Le savoir imageant）が登場してくる読書意識との相違を力を込めて論述しているところは印象深いが，さらにこれら読書意識の両者の基底に，ひそかでほのかではあるが厳としたイメージ的意味の流れに支えられたイメージ体験が把握されると考えるのである。

注

1）Jean－Paul Sartre, L'imaginaire, Gallimard, 1940. PP. 115－135. サルトル・平井啓之訳『想像力の問題』（人文書院，昭30）110－131頁　本訳書では Ie savoir に対して「識知」を当てている。

2）Émile Benveniste, Problèmes de Iinguistique générale, 2, Gallimard, 1974. PP. 51－66.

3）Christian Metz, Essais sémiotiques, Klincksieck, 1977. PP. 147－151.

4）Henri Wallon, De l'acte à la pensée, Flammarion, 1942. PP. 185－206.

5）F. de Saussure, Cours de Iinguistique générale : Édition critique, par R, Engler, Wiesbaden, Harrassowitz, 1967－1968. I P. 25. Note 9.1〔3295〕

6）Roland Barthes, Le plaisir du texte, Edition du Seuil, 1973. ロラン・バルト，沢崎浩平訳『テクストの快楽』（みすず書房，昭52）

7）同上書〔1）〕PP. 128－135. 同上訳書〔1）〕123－131頁